

第12節 デザイン・リサーチ・インスティテュート

第1項 デザイン・リサーチ・インスティテュート設置

(1) デザイン・リサーチ・インスティテュートの設置の目的

デザイン・リサーチ・インスティテュート（略称：dri）が設置された2021（令和3）年4月は、本学におけるデザイン領域の出自である東京高等工藝学校が創設された1921（大正10）年から数えて100周年の節目に当たる年である。driは、100年の歴史を誇る千葉大学のデザイン教育研究を、産学官連携によるデザイン実践に基づき、従来の工学全般から文理横断へと分野を超えて発展させることを目的として設置された。持続可能な社会の発展や少子高齢化等、今日の社会課題はますます複雑化・高度化している。driが本学のデザイン分野の総合的教育研究拠点となり、イノベーション創出に向けた分野横断的デザイン教育研究並びに企業等と連携した多様で実践的な研究等を展開することが求められている。

(2) 墨田サテライトキャンパスの開設とdriとの連携

本学では、dri設置と同時に、東京都墨田区に、本学としては初となる東京におけるキャンパス「墨田サテライトキャンパス」を開設しており、同キャンパスにおける教育研究活動並びに運営はdriが担っている。

同キャンパスのコンセプトは、「生活の全てをシミュレートする」ことである。driが主導し、建物全体を実証実験空間として生活の全てを再現可能な最先端機能を有するとともに、24時間稼働するよう設計がなされている。driは、同キャンパスの存在とその地の利を最大限活かしつつ、従来の西千葉キャンパス等における教育研究活動と連動させ、デザイン教育研究をより進化・深化させることを目指している。同キャンパスの活用を念頭に置きつつ、下記の3点をdriにおけるデザイン教育研究の強化ポイントとしている。

a. エンジニアリングの進展に対応した実践的教育研究

エンジニアリングにおいては、常に新技術が創出され多様化が進んでいる。driに

においては、多様化する専門領域を取り入れつつ、高度実務家を交えたプロフェッショナル教育と最先端の研究を行う。とりわけ、東京を本拠地とする企業のインハウスデザイナーや独立デザイナーは少なくなく、driでは、クロスアポイントメント制度を導入し、東京を中心に活躍するプロフェッショナルデザイナーを雇用することにより、デザイン人材の流動性を高めるとともに最先端領域を取り込みつつデザイン実践によるデザイン教育研究の展開を図っている。

b. リアルとバーチャルの統合による体系的教育研究

driにおいては、シミュレーション技術の導入により、実物大の製品のプロトタイプングや、IoTなどの最新技術を駆使したバーチャル空間への投影による、よりリアリティーのある環境における教育研究を行う。墨田サテライトキャンパスには、新時代のデザイン教育研究にふさわしい空間構成並びに最新のデジタル造形機器を導入し、その実現を図っている。

c. ものづくりへのコミットによる実践的な創造性の涵養と研究・開発の実施

デザインは机上で成立する領域ではない。常に社会とのコミットが必要不可欠である。特に墨田サテライトキャンパスが開設された墨田区は、伝統工芸から最先端技術まで多様なものづくりが集積するエリアであり、具体的なものづくりを、実践に基づき学習する機会を提供し、そのことを通して確かな創造性を涵養する。また、得られた成果は、研究・開発に即時フィードバックを行うことでさらなる展開を図っている。

第2項 デザイン・リサーチ・インスティテュート設置の経緯

本学のデザイン領域におけるデザインとは、「人間の生活をより豊かにするための実践的科学」である。決して、ものの色やかたちを決定することのみを目的にした行為ではない。また、デザインという概念はアプリアリに存在しているのではなく、社会の要請に応じて、そのあり方を模索し適切な姿を創出する必要がある。それゆえ、本学においては、長らく、クロスファクタライゼーション（Cross-fertilization：異花受粉）をコンセプトとする領域融合並びに実社会との連携に基づき、日本をリードするデザイン領域の進化・深化を図ってきた。こうした本学のデザイン領域の特質を活かした試みがこの度のdriの設置と運営に結び付いていると言える。

dri設置にあたっては、2020（令和2）年度に、学内に渡邊誠理事（教育担当理事）

を室長とする dri 設置準備室が設置され、デザイン、建築、都市環境、イメージング科学、ランドスケープ（園芸）、予防医学の多領域の教員が構成員となり検討を重ねた。墨田キャンパス活用検討を開始した当初は、「デザイン・建築スクール」構想のもと、学生定員移管を含めた教育組織の新設等も検討していたが、「地域における大学の振興及び若者の雇用機会の創出による若者の修学及び就業の促進に関する法律（2020年施行）」において特定地域（東京都23区）の学部学生定員増加が認められなくなったため、“サテライト”キャンパスとして開設し、主としてキャンパスを活用する組織として dri を学内に設置する構想に変更したという経緯がある。

第3項 デザイン・リサーチ・インスティテュートの教員と領域

dri の所属教員は、2021（令和3）年3月まで大学院工学研究院に所属し、工学部総合工学科デザインコース並びに大学院融合理工学府デザインコースにおいて教育研究を担当していた21名及び2021（令和3）年4月採用の1名の計22名であった。この他、dri 兼務教員として、大学院工学研究院、大学院園芸学研究院、予防医学センター所属の教員計16名も参画しスタートを切っている。

(1) 所属教員と専門領域

2023（令和5）年4月1日現在の所属教員並びに専門領域を以下に示す。

システムプランニング：小野健太教授、三輪正幸助教、Juan Carlos CHACON QUINTERO 助教、渡邊誠教授*、永瀬彩子准教授*、Algirdas Paskeviciusk 准教授*（*国際教養学部兼任）、デザインマネジメント：渡邊慎二教授、材料計画：寺内文雄教授、佐藤浩一郎准教授、意匠形態学：久保光徳教授、田内隆利准教授、コミュニケーションデザイン：張益準准教授、人間情報科学：岩永光一教授、石橋圭太准教授、心理・行動科学：桐谷佳恵准教授、商業デザイン：小原康裕助教、環境デザイン：佐藤公信教授、原寛道教授、今泉博子助教、人間生活工学：下村義弘教授、デザイン文化計画：植田憲教授、青木宏展助教、コンテクスチュアルデザイン：樋口孝之教授、サステナブルデザイン：UEDA EDILSON SHINDI 准教授

(2) クロスアポイントメント教員と専門領域

上述したように、dri においては、より多様なデザイン領域を取り込み、デザイン領域そのものの展開を図っており、そのために、クロスアポイントメント制度を活用

した実務家教員の雇用に着手している。2022（令和4）年4月1日付で下記の3名の実務家をクロスアポイントメント制度を活用した特任教員として雇用了。特に墨田サテライトキャンパス並びに周辺地域で行うデザイン実践に基づくデザイン教育研究を展開している。2023（令和5）年4月1日現在のクロスアポイントメント教員並びに専門領域を以下に示す。

モビリティデザイン（根津孝太特任教授）、空間デザイン（藤本香特任教授）、プロダクトデザイン（三浦秀彦特任教授）

(3) 兼務教員と専門領域

2023（令和5）年4月1日現在の兼務教員並びに専門領域を以下に示す。

安森亮雄教授、柳澤要教授、岡田哲史准教授、鈴木弘樹准教授、伊藤潤一助教、湯浅かさね助教（以上、大学院工学研究院・建築学コース担当）、豊川斎赫准教授（大学院工学研究院・都市環境システムコース担当）、堀内隆彦教授、溝上陽子教授、今泉祥子准教授、久保尋之准教授、津村徳道准教授、佐藤弘美助教（以上、大学院工学研究院・イメージング科学コース担当）、椎名達雄准教授（大学院工学研究院・物質科学コース担当）、武田史朗教授、霜田亮祐准教授（以上、大学院園芸学研究院・ランドスケープ学コース担当）、花里真道准教授（予防医学センター）。

第4項 デザイン・リサーチ・インスティテュートの組織と活動

開設当初の2021（令和3）年より、植田憲教授がインスティテュート長を、原寛道教授が副インスティテュート長を務めている。毎月定例の教員会議を開催し、さまざまな取り決めを行っている。常置委員会としては、総務委員会、研究推進委員会、広報委員会、国際化推進委員会が設置され所属教員が運営している他、墨田サテライトキャンパス管理・運営委員会もdri内に設置され、所属教員はもとより兼務教員と協力しつつその任務に当たっている。

dri設置ならびに墨田サテライトキャンパス開設後、およそ1年半が新型コロナウイルス感染症の世界的蔓延の時期と重なる。それゆえ、必ずしも設立当初に想定されていた活動が十全になされたとは言い難い状況ではあったが、driでは、いち早く2021（令和3）年5月より、地域開放エリア1階の地域連携スペースを墨田区のコロナワクチン接種会場として提供するとともに、墨田区並びにdriの教員、デザインコースの学生が共同してワクチン接種を円滑に進めるためのサインデザインを行い、

実際のワクチン接種に提供している。被接種者が手にする通称「虹色ファイル」と連動させた同サインシステムは、区民・医療関係者らに受け入れられ円滑なワクチン接種の実施に寄与するとともに、世界的なデザイン賞であるドイツのレッド・ドット・デザイン賞並びに日本のグッドデザイン賞を獲得するに至っている。後者にあつてはベスト100に選定され、これは千葉大学において初の事例となった。

また、他にも、地域社会との連携に基づくデザイン実践を、同キャンパスを軸としたデザイン教育研究と連動させつつ多数実施している。墨田区との連携事業・連携研究だけでも、2021（令和3）年度は9件、2022（令和4）年度は12件の実施となり、順調な伸びをみせていると言ってよい。それらの中には、墨田区の文化財の造形をデジタル記録するとともに得られたデータを活用して「触れる展示」等のユニバーサルデザイン化を図る研究、次世代を担う子どもたちが区内事業所等より産出される副産物を用いてものづくりを行うことでものづくり並びにその産業への興味・関心を高めるための研究、区内オンデマンドバスの社会実験に基づく区民が親しむバスや看板等のあり方に関する研究、あずま百樹園再整備に伴う公園トイレ環境の計画に関する研究など、社会との連携に基づくデザイン実践を多数実施している。

第5項 デザイン・リサーチ・インスティテュートのこれから

driにおいては、国内の社会を対象とするのみならず、国際的なデザイン研究、国際デザインワークショップなどの実践を通して、予てより千葉大学における国際化・多様化をリードしてきた実績を有している。2023（令和5）年4月現在、driが主導する大学間交流協定校は15か国46校、部局間交流協定校は8か国18校に上る。

また、上述したように、領域としての進化・深化を図っており、目まぐるしく変容し続ける今日の社会において、ますます日本はもとより国際社会におけるデザイン領域をリードしつつ、より豊かな暮らしを創出する領域として、多様化・国際化を図っていきたい。その意味では、まさに、シミュレーションに基づくデザイン実践をいかに展開させていくかが鍵を握っていると言える。